

2015年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	犬山市立犬山南小学校	氏名	伊藤 樹李
-----	------------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私の本研修の目的は、①子どもたちが抱いている途上国の否定的なイメージを変えること、②自分が抱いている漠然とした国際協力・支援の在り方の答えを見つけることだった。①に関しては、現地で自然や町並み、人々の生活の様子を撮影したり、楽器や民芸品を購入したり多くの教材を収集することができた。②に関しては、“支援の形は1つの答えに絞られない”という大きな気付きがあった。これは、現地の小学校や農家、野口記念医学研究所などの訪問地で各々のスキルを生かし、活躍する多くの日本人との出会いのおかげである。研修終盤でJICAの木村さんが支援のポイントは、①途上国の現状把握、②段階的、③継続的の3点であるとお話くださったが、この話は自分でも驚くほど心に落ちた。本研修の達成度及び満足度は非常に高い。教師という自身の立場を生かし、子どもたちにガーナを起点に世界の現状を広く伝えていくことが、私にまずできる間接的な支援の形であると感じた。

2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

多くの日本人のガーナのイメージは“チョコレート”、多くのガーナ人の日本のイメージは“TOYOTA”。国名こそ知っているものの、お互いの生活や考え方についてはあまり知らない。私自身、訪問前は具体的なイメージがもてていなかった。そのため、毎日車窓から見る「頭にものを乗せて運ぶ人々」や「信号待ちの度に窓を叩くベンダー」「ネットのないサッカーゴールを目指し、ボール代わりのヤシの実を追いかける子どもたち」などガーナの日常は非常に興味深かった。また、研修中、ガーナ人に「ニーハオ?」と言われることが多かった。「NO.JAPANESE.こんにちは。」と返すと、決まって「Oh~JAPAN!」とにっこり笑顔。握手を求められることもあり、ガーナ人が日本を肯定的に捉えてくれているということを実感した。日々の人間関係でも同じだが、相手が肯定的だと、こちら嬉しく自然により肯定的になれる。私がガーナと肯定的に出会うことができたのは、ガーナ人のおかげかもしれない。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

今回の研修で、私が最も楽しみにしていた訪問地の1つに小学校がある。日本と環境は違えど、熱心に学ぶ子どもたちとそれを全力で支える先生…しかし、私のそんな想像とは裏腹に、初日JICA事務所で教育担当の専門家からお伺いした話はガーナの教職人気と教員の勤労意欲の低さという衝撃的なものだった。その後、少し複雑な思いで訪問した小学校…そこで出迎えてくれたのは、私のもやもやした気持ちを吹き飛ばす子どもたちの歓声と笑顔だった。現地の先生との意見交換では、笑顔で子どもたちの未来を想う先生方の温かい心を感じる一方で、金銭的に厳しい現場の現状を強く感じた。もし働いてもきちんとお給料が貰えないとなったら、私は今のように一生懸命働くことができるだろうか?とふと疑問に思う。ともすると、ガーナの先生方は日本の先生よりも教育熱心なのかもしれない。ガーナの教育には課題がまだ山積している。しかし、学校には先生と子どもの“笑顔”があふれるという最高の同一性を感じられたことは非常に嬉しく思う。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

「今、あなたは幸せですか？」そう尋ねると、ガーナ人は幸せだと答える人が多いと言う。実際、研修中に出会ったガーナ人は皆、活力にあふれ生き生きとして見えた。かく言う私も今、幸せだ。それは、水道や電気の通った家に住んでいるからではなく大切な家族や友人、同僚がいるからだという理由が1番だと思う。ガーナ人は家族思いだと言われる。やはり“人との繋がり”はどんな発展要素よりも幸せの絶対条件になり得ると感じる。

しかし、人間は生まれた地域・環境・家庭によってそんな幸せが持続するか否かの差が大きい。病気になってしまった時、インフラや保健医療、金銭事情などで救える命が救えず、繋がりが絶えてしまう。このリスクは今ガーナの方が高いが、格差問題が進む日本国内でも10年先はわからない。日本では、一番大切であるはずの人との繋がりを自殺という形で自ら絶ってしまう人も多くいる。地域や家庭環境に関わらず、一人ひとりの幸せが何十年、何百年先まで続く未来を、世界中の人が繋がって作っていく必要があると強く感じた。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

JICAの事業の良いと思ったところは、相手の立場に立った支援を行っているところである。支援をする日本が主体ではなく、あくまでも主体は途上国で、我々はあらゆる角度からサポートする形であるという理念に強く共感した。また、その考え方にに基づき、途上国の状況に応じて支援の形を徐々に変化しているという点も素晴らしい。今回、訪問させていただいた野口記念医学研究所を例にとっても、設立当時から35年間はあらゆる人的・物的支援を行ってきたが、現在は等しい立場で共同研究を行うイコールパートナーシップの関係に変化していると伺い、着実に実績を積み重ねていることを感じた。

今後あるといいなと思う視点としては、青年海外協力隊の方々の日本国内での還元法を挙げる。ガーナで出会った青年海外協力隊の方は非常に熱意ある素敵なたちばかりであったので、是非今すぐに自分の学校の子どもたちに現状を伝えたいと思った。青年海外協力隊の方の負担になるかもしれないが、派遣中に日本国内の学校へ活動状況等を定期的に報告したり、子どもたちと交流したりするシステムがあるといいなと思った。子どもたちがまさに今、世界で起こっていることを生で感じ、リアルタイムで国際協力の現場を感じることができると尚良いと思う。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

※別掲

5. 印象に残る写真2点とその解説

●写真1… [DOK_9303]

◇キャプション：ぼくの夢、紙飛行機に乗せて…

◇解説文：銀行員、エンジニアなど笑顔で夢を教えてくださいましたガーナの子どもたち。交流で一緒に作った紙飛行機に乗せて…みんなの夢が叶いますように!



●写真2… [DOK_6054]

◇キャプション：お土産屋さんにて、ひと時の交流

◇解説文：値切り交渉の末、太鼓を購入。その後、お土産屋さんのお兄さんと一緒に奏でたガーナのリズム。楽しいひと時はプライスレス！ありがとう。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・お土産は大・中ともに坂角総本店のゆかり、青年海外協力隊向けの小は量重視でレトルトカレーやインスタント味噌汁、ラーメン、お菓子などを持って行きました。どれも好評でしたが、特にほんだしや鍋キューブなどの出汁は青年海外協力隊の方に喜んでいただけました。
- ・お土産は日本から全員で分担して持って行きますが、現地に着いたら1度全員全て出して、バス内などにまとめて保管しておくといいです。残数管理もすぐできるし、急に必要になった場合にも対応が可能です。
- ・ガーナは何曜日生まれかで名前が決まる。生まれた曜日を調べて行って、現地で教えてもらおうと自己紹介やちょっとした会話に使えます。
- ・ホテルの部屋は水道・排水・窓が閉まらないなどのトラブルがありました。のんびりしたガーナ人の気質か、なかなかすぐ対応してもらえない時もありますが、負けずに何度も要求することが大切です。
- ・毎日のワークショップが非常に勉強になります。自分の感じたちょっとした気持ちをメモしておくとか後々役立つことも。

7. その他全般を通じての感想・意見など

今回の研修で、ガーナについてはもちろん、日本についても考える機会となった。また、今までの海外渡航時には考えることのなかった“国際協力”や“日本と渡航先とのつながり”等の広い視点で様々な場所を訪問でき、とても勉強になった。さらに、JICA や NIED、他の参加者の先生方のおかげで、より深い学びになったこと、感謝する。貴重な機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

以上